

# 大学を去るにあたって

松岡 儼一

わたしが本学に法学担当の教員として赴任したのは、一九九一年四月である。まる六年間お世話になったことになる。短かったような気がすると同時に、十年も二十年も居たような気もする。

赴任した当初、国文学科系列に所属した。そして、なぜか二年目が終わろうとした九三年二月から同年七月末まで教務部長を務めることになった。本学のことがよく分からないうちに教務部長になつてしまい、本人の当惑は普通ではなかったが、まわりの先生方、事務職員の当惑はさらに強かったと思う。御迷惑をおかけしたことをここに謝っておきたい。

九三年四月から突然文化学科系列所属となった。そして翌九四年四月からは文化学科の日本思想史を兼任することになった。それからまる三年間、この兼任が続いたが、学生に迷惑かけたかもしれない。特に演習Ⅰの学生には演習Ⅱまで一緒に勉強できなくなったことを謝りたい。

この六年間、同じ年に赴任した神山さんをはじめとして友人には恵まれた。なんとかやってこれたのは、この友人たちのお陰である。その意味では愉快な六年間であった。わたしのこれまでの人生の中で、この六年間ほど愉快だったことはない気がする。感謝あるのみである。

しかし、大変な六年間であったことも事実である。わけても教務部長としての六カ月が一番印象に

残る。教務部長になってわずか十日ほどで文部省に行くはめになった。右も左も分らないまま文部省に行き、ともかくにも四月から実施を予定していた新カリキュラムを受け取ってもらわねばならなかった。このとき一緒に行ってくださった細井さんと頭を下げ続けた。文部省から戻ると教務委員会で対策を練った。二、三月は本来春休みであり、それぞれの研究に没頭できるはずであったのにかかわらず、一日に二回の教務委員会を開くのはめずらしくなかった。さらにそれでも足らず、夜電話で連絡しあった。三月に入って文部省で書類を受け取ってもらったときは、正直言って、教務委員はもとより、細井さんをはじめとした事務の人達には感謝の気持ちで一杯であった。

四月に入って新カリキュラムが動きはじめても事態は一向に変わらなかった。学則改定に伴い新規の諸規定を作り続ける必要があったのみならず、カリキュラムの矛盾があらわになりはじめたからである。相変わらず教務委員会は忙しかった。そのうえ当時学長であった和田さんをお願いしてカリキュラム等総点検委員会を作ってもらい、次期カリキュラム改定の用意をしなければならなかった。そうした全過程において、教務課員わけでも託磨さんに迷惑をかけ続けた。感謝あるのみである。

大学が冬の時代を迎えようとしているとき、居てもお役にたてたかどうかは別にして、個人的理由で本学を去るのは、戦線放棄しているように申し訳ない気がする。大学の一層の発展を祈念します。

(まつおか きいち・日本政治思想史)